今回は

名古屋経済大学

「学び方の学び」習得めざす体験型プロジェクト

犬山の魅力多面的に発掘

犬山市にキャンパスを構える名古屋経済大学。犬山の緑あふれる景色の中に、ゆったりと広がるキャンパス。ここで「学び方の学び」習得を目標に展開されている「体験型プロジェクト」について、今回は話を聞いた。地元・犬山市に密着した活動も多く、地元メディアなどで既に取り上げられてもいる。

学生と教員が一緒に学ぶ

今年度から始まったこのプロジェクトには、16のプログラムが準備されている。「地域の食材を知る」「犬山の観光戦略を考える」「工業都市としての犬山を知る」など、犬山をテーマにしたものが中心。さまざまな方面から犬山にアプローチして、学び、体験し、その体験をさらに深い学びへと活かすプログラムになっている。この経験と知識の往復活動を、学生個人にゆだねるのではなく、大学をあげてバックアップしようというのだ。このプロジェクトには経営学部、経済学部、法学部の教員も総動員で参加している。

プロジェクトは前期の前・後半、後期の前・後半と４つに分かれて実施、現在は前期のものが終了している段階にあたる。

取材にお邪魔した日は、ちょうど「工業都市としての犬山を考える」プログラムの授業の日。犬山市は、犬山城を有し、城下町としての顔も持っている半面、大手メーカーと取引のある中小企業がたくさん工場を構えており、工業都市としての顔も持っている。その工業都市としての犬山へのアプローチとして、さらには環境問題へと考えを深めようと、6月に市外の製紙工場へ見学に出かけた。

「工業都市としての犬山を考える」プログラムでは近隣の製紙工場を見学

町おこしや活性化の一助に

その報告会を見せてもらったが、どの班もパワーポイントを使って当日聞き取った内容をまとめ、発表していた。発表に対して発せられる質問に対し「〇〇ではないかと思う」と自分の考えも述べ、見学が確実に彼らの中で思考を深める種になっていることが感じられた。

このプロジェクトでは、プログラムを担当する教員が必ずしも各自の得意分野を担当しているわけではないこともあり、教員も学生と一緒に「学んで」いる。従来の学問を教えるだけの学習ではなく、新しい学びの機会を得ることは教員にとっても新鮮な体験で新しい発見の機会ともなっている。

「社会は常に動いています。いろいろな物事がマニュアル通りに行かなくて当たり前。何かにぶつかった時にどう動くか、身を持って体験することで、社会人としての基礎的な力をつけたい」。このプロジェクトの責任者でもある経営学部・中西昌武教授は語る。「学び方の学び」こそが社会人基礎力の源になる、という考えだ。

犬山をテーマにした活動の多いこのプロジェクト。今後は自治体や地元企業・団体のさらなる協力を仰ぎ、町おこし、町の活性化の一助となりたい、と関係者は今後を見据える。

例年にも増して暑い今年の夏。この夏休みが終わると後期のプログラムがまた始まる。

キャリアセンターとゼミをジョイント

「どのブロックをどの位置に?」。見本を見てきたメンバーの話を聞き、組み立てていく

就活 こんなサポート

名古屋経済大学では、今年度から「キャリアセンターとゼミのジョイント」という新しい試みを始めている。就職活動のみの支援ではなく、より実りある学生生活をサポートすることで、その中で得たこと、学んだことを就職活動に、ひいては社会生活に活かせないかという思いから発した活動だ。

初年度の今年は、経営学部の中西教授を中心に、ゼミの中で「チームビルディング」にトライしている。見本のレゴブロックを「見て」、どのように組まれていたかを「伝え」、それを聞いた人が「組み立てる」。そして間違いがないか「検証」し、みんなで「確認」しながら、より早く正確に見本と同じようにブロックを組んでいく。

「コミュニケーションや作業分担で結構差がつく」（キャリアセンター長・中村昭典さん）。簡単なゲームに見えるが、意外と奥が深い。プログラムはキャリアセンターとキャリアサポーターが共同で開発し、ゼミに乗り込んでいる。

これまでなかった新しい試みが学生にどう浸透していくか、結果は焦らず待ちたい。